



KALEVALA

カレワラ

の記憶

やましたひろ

カレワラの記憶

- Kalevala -

やました ひろ

「アージャ・サージャ・ヴァイナモイネン……」

ふとすると口をついてでる呪文のようなことばがある。かすみのような古い記憶の底から。

中学校のときにエスペラントを学びはじめ、それからまもなく、高校生にとってはたいへん高価だったエスペラント訳「カレワラ」を手にした。冒頭の語句は、その「カレワラ」の中に頻出する、偉大なる吟遊詩人ヴァイナモイネンを称える枕詞、「老いて賢きヴァイナモイネン」なのである。

カレワラはフィンランドに伝わる、二万行をこえる叙事詩だ。文字のない時代から今日まで、吟遊詩人たちが口から口に伝えてきた。全部歌い終わるのに数日を要するという、英雄物語である。

布張りのざらざらしたハードカバーをめくると、ヘルシンキ印刷、と書いてある。それだけで、はるばる海を越えてわたしに届けられたこの本の運命を思い、感慨にふけた。ページを繰るごとに、あちこちにちりばめられている、切り絵のような挿し絵に、はるか北方の国フィンランドを、そして、そこに暮らす人々を空想した。

まだ日本語訳カレワラのなかったときで、この本が唯一、北歐古代の風景を伝えてくれたのである。

冒頭の歌はこう始まる。

我が心は歌う
わが頭(こうべ)は欲する
民族の歌を歌おうと
さあ友よ
わが同胞よ
手に手を取って
うたおうではないか

あっというまにカレワラの古代世界に引き込まれた。言葉の意味だけなのではない。エスペラント訳の持つ、強弱のリズムのひたすらな繰り返し。

トンタン・トンタン
トンタン・トンタン
加えてみごとな頭韻。

カレワラの世界は、何もないところから始まる。海の上をさすらう永遠の処女イルマタル。その休んだ膝の上で卵を温める海鳥。彼女が熱くて膝を動かすと、卵は海に砕け、そのかけらが飛び散って森羅万象を形作った……。

いままで聞いたこともない古代の物語が展開していく。北欧は氷河やフィヨルド、オーロラなどではかすかに知ってはいた。しかしこの物語を読みすすめるなかで、そこに住んでいた人間の躍動が胸にずんと伝わって来た。

シベリウスの交響詩「トゥオネラの白鳥」はこれを題材としているそうだ。黄泉の国、寒々としたトゥオネラ川に浮かぶ白鳥。凍てつく大地。そこに向かう勇者レンミンカイネン。

この北欧の物語に影響されてのことだろう、エスペラントの文芸誌『ノルダ・プリズモ』(北のプリズム)を購読し始めた。高校生には痛い出費ではあったが、毎月国際便で届く薄い雑誌は見るのが楽しみであった。

人間関係が希薄になっているといわれている現代、東日本の猛烈な災害を経験して、そのつながりは決して途切れていなかったことを悟った。

今、わたしは思い起こす、カレワラの冒頭の歌を。

さあ友よ
わが同胞よ
手に手を取って
うたおうではないか